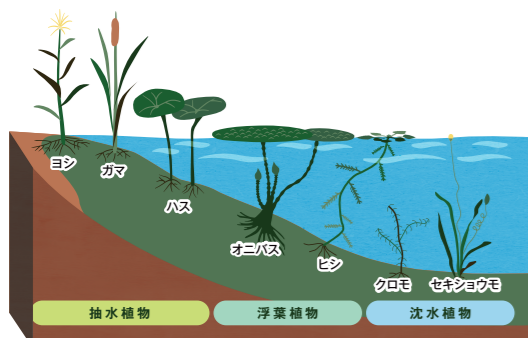


多様な生き物たちが生育・生息する「潟」

水陸移行帯における水生植物の分布図



潟には陸域や水域だけでなく、その境界となる水陸移行帯があり、左の図のように、水上に茎と葉を伸ばす抽水(ちゅうすい)植物、葉を水面に浮かべる浮葉(ふよう)植物、全体が水中にあり、水底に根を張る沈水(ちんすい)植物が生育しています。

抽水植物群落は野鳥のすみかや営巣場所として、また、浮葉・沈水植物群落は、野鳥だけでなく魚類や両生類、昆虫類のすみか、えさ場となります。

多様な植物がすみ分けているこの空間は、多くの生き物たちが生育・生息している重要な場所なのです。



潟の環境と人の営みとの関係

昭和の中頃まで、潟端に住む人々にとって、フナ、ドジョウ、ナマズ、コイなどの魚、カモなどの鳥、ハスやヒシなどの植物は、重要な食糧源でした。

また、植物の中でも、ヨシは屋根草や壁の下地、ヨシズ材の材料として利用されていました。人々がヨシを刈り取っていたことは、ヨシが吸収した水質汚濁の原因物質を潟の外へ排出することになり、潟の水質浄化に大きな役割を果たしていました。

潟底の土は、多量の有機質を含み、肥料効果が高く、稲作をする上での肥料や苗床として利用されました。低湿地の干拓土やアゼ作りにも重宝したそうです。この潟底の土をかき揚げる「ド口揚げ」は、潟が浅くなることを防ぎ、湿性遷移※を止めることにつながりました。

現在、生活様式や産業構造の変化に伴い、潟に対する人々の直接的な関わりは減ってきていますが、福島潟のヨシ焼きやヒシもぎ、佐潟の潟普請やヨシ刈りなど、潟環境の保全につながる活動をしている人たちもいます。

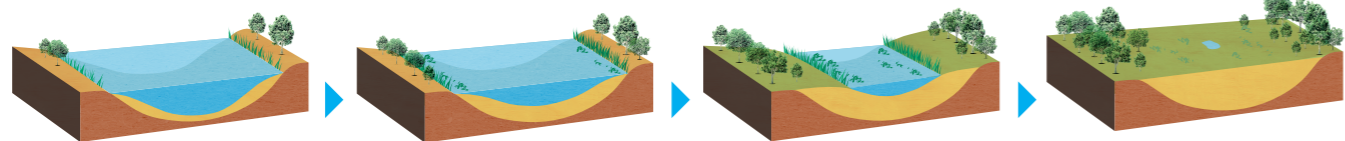


昔のヨシ刈りの様子 北区郷土博物館所蔵

※湿性遷移(しっせいせんい)とは

ある場所に生育・生息する生物種集団が、自然に移り変わっていく現象を「遷移(せんい)」といいます。下図のように、潟や湖など水のある場所から始まる遷移を「湿性遷移(しっせいせんい)」といいます。

潟のような広い水辺空間は、風や川によって運ばれてくる土砂、潟の中にある動植物の遺骸(いがい)などが潟の底に堆積していくと、水深が浅くなり、やがて湿原、草原へ移り変わっていきます。



水辺の湿性林とヨシ群落がある程度で抽水植物もほとんど見られませんが、

堆積が進んで、抽水植物、浮葉植物、沈水植物などが進出するようになります。

水深が浅くなり、陸化がかなり進行します。植物相がもっとも多様な段階です。

陸化がさらに進行し、最終的には草原になります。

飯泉優ほか(1993)「大自然のふしぎ 植物の生態図鑑(学習研究社)」より引用・改変

潟に関する情報や歴史を知ることができる主な施設

北区郷土博物館	新潟市北区嘉山3452	TEL:025-386-1081
水の駅「ビュー福島潟」	新潟市北区前新田乙493	TEL:025-387-1491
みなとぴあ(新潟市歴史博物館)	新潟市中央区柳島町2-10	TEL:025-225-6111
江南区郷土資料館	新潟市江南区茅野山3-1-14	TEL:025-383-1001
佐潟水鳥・湿地センター	新潟市西区赤塚5404-1	TEL:025-264-3050
潟東歴史民俗資料館	新潟市西蒲区三方92	TEL:0256-86-3444



潟で使われていた漁労・狩猟用具(潟東歴史民俗資料館)



潟MAP
かたマップ
新潟市の潟(湖沼)

—このマップとともに、新たな「潟」の魅力を見つけてみませんか—



※表紙に掲載の図は、各潟の形を表現するためのものであり、実際の大きさの比率とは異なります。

越後平野は低湿地帯であったため、戦国時代には現在より多くの潟が点在しており、福島潟や鳥屋野潟などは、その頃から存在していたことがわかります。越後平野の変遷をたどると、新潟市内の潟が、どのようにその姿かたちを変えていったのかを知ることができます。



■新潟市発行「新潟市史 通史編1」p.16「越後平野の概観」、新潟市歴史博物館発行「絵図が語る みなと新潟」p.10「戦国時代の三ヶ津と新潟市域のみなど」をもとに作成



■国土地理院5万分の1地形図(昭和27年)をもとに作成

※このマップでは、自然にできた湖沼のほか、歴史的に人々に関わりの深い水辺空間として16の潟(湖沼)を掲載しています。



にいがたの「潟」

古くから越後平野の湖沼は、その成り立ちなどにかかわらず、総称して「潟」と呼ばれてきました。潟は多くの動植物が生息・生育し、憩いや活動の場として“ふるさと”を象徴する存在です。

北区

1 福島潟(ふくしまがた)
面積が市内最大の潟。国の天然記念物オオヒシクイの越冬地では飛来数が日本一です。また、希少植物オニバスの日本北限の自生地でもあります。
面積:約262ha 水面標高:-0.7m
所在地:新鼻甲

北区

2 内沼潟(うちぬまがた)
福島潟とつながっていた小さな潟。江戸時代に築堤された山倉新道(やまくらしんどう)によって、福島潟から分離されました。
面積:約1.3ha 水面標高:-0.6m
所在地:内沼

北区

3 十二潟(じゅうにがた)
蛇行した阿賀野川の一部が残った三日月湖。かつては阿賀野川の本流でした。地元では「古阿賀(ふるあが)」とも呼ばれています。
面積:約5.4ha 水面標高:1.6m
所在地:平林、十二、灰塚

北区

4 松浜の池(まつはまのいけ)
阿賀野川と日本海のすぐそばの砂丘地に位置する池。地元では「ひょうたん池」とも呼ばれています。希少なトンボ類が確認されています。
面積:約2.2ha 水面標高:0.5m
所在地:松浜

東区

5 じゅんさい池(じゅんさいいけ)
東池(0.3ha)、西池(0.5ha)から成る砂丘上の池。初夏にはホタルが飛び交います。この池の名前は、水生植物「ジュンサイ」に由来しています。
面積:約0.8ha 水面標高:-0.3m
所在地:松園

中央区

6 鳥屋野潟(とやのがた)
市街地に隣接し、都心部に貴重な自然環境を残す潟。遊水池としての機能を備えています。周辺には公園や公共施設が整備されています。
面積:約158ha 水面標高:-2.5m
所在地:鳥屋野ほか

中央区

7 清五郎潟(せいごろうがた)
鳥屋野潟の南側にある潟。鳥屋野潟で風雪が強い時にハクチョウのねぐらとなっています。「清五郎」とは、かつての新田開発に関わった人の名前です。
面積:約2.0ha 水面標高:-2.5m
所在地:清五郎

江南区

8 北山池(きたやまいけ)
亀田砂丘のくぼ地にできた池。池を中心に公園が整備され、園内では緑色の花を咲かせる桜「御衣黄(ぎょいこう)」を見ることができます。
面積:約1.6ha 水面標高:0.4m
所在地:北山

秋葉区

9 六郷ノ池(ろくごうのいけ)
阿賀野川の河道跡にできた池。ヘラブナ釣り場として知られています。
面積:約1.6ha 水面標高:6.5m
所在地:六郷

秋葉区

10 北上の池(きたかみのいけ)
能代川左岸の堤防沿いの県道の脇にある小さな池。地元では「切所(きりしょ)」と呼ばれています。
面積:約0.2ha 水面標高:4.3m
所在地:北上

西区

11 佐潟(さかた)
上潟(うわかた)と下潟(したかた)の二つから成る潟。1996(平成8)年3月に、周辺湿地部を含めて、ラムサール条約湿地として登録されました。
面積:約44ha 水面標高:4.8m
所在地:赤塚

西区

12 御手洗潟(みたらせがた)
佐潟の北側にある潟。この潟の名前は、かつて近くの神社にお参りする際、ここで手を洗い、身を清めたことに由来しています。
面積:約6.5ha 水面標高:6.6m
所在地:赤塚

西区

13 ドンチ池(どんちいけ)
数多くの伝説が残る池。池の名前は、土地や水の権利をめぐる争われた所「論地(ろんち)」がなまったものと伝えられています。
面積:約0.3ha 水面標高:2.6m
所在地:赤塚、中権寺

西区

14 金巻の池(かねまきのいけ)
中ノ口川の堤防が、洪水時に破堤してできた池。地元では「宮池(みやいけ)」「水戸際池(みとぎわいけ)」などと呼ばれています。
面積:約0.7ha 水面標高:0.1m
所在地:木場、金巻

西蒲区

15 上堰潟(うわせきがた)
角田山の麓(ふもと)近くの潟。かつては農業のかんがい用水源でしたが、自然が楽しめる公園となっています。豪雨時には雨水の流出を抑える調整池となります。
面積:約11ha 水面標高:3.5m
所在地:松野尾

西蒲区

16 仁箇堤(にかつつみ)
農業用水として利用されている堤。ここでは、昭和の中頃まで「坂内網(さかうちあみ)」と呼ばれていましたが、豪雨時には雨水の流出を抑える調整池となります。
面積:約5.6ha 水面標高:9.2m
所在地:仁箇

※「水面標高」とは、東京湾の平均海面(T.P.)を標高0mにした水面の高さのことです。信濃川河口付近の日本海の海面は、東京湾より0.5m程度高くなっています。

